

鳩山窯跡群

25年を過ぎて振り返る大発掘



手前から小谷・柳原・広町遺跡

2012・3

埼玉県比企郡鳩山町教育委員会

鳩山窯跡群の位置



国土地理院 1:200,000 東京・宇都宮を使用

例言

1. 本冊子は、鳩山町教育委員会主催の第14回文化財展「鳩山窯跡群—25年を過ぎて振り返る大発掘—」の展示パンフレットである。展示会は鳩山町多世代活動交流センター文化財展示室で開催し、その会期は平成24年3月10日～同30日である。
2. 展示会は平成23年度埋蔵文化財保存活用整備事業として文化庁の補助を受け開催したもので、昭和59年3月～同60年12月まで実施した、ゴルフ場造成に先立つ大規模発掘調査について特集した。
3. 展示会の企画と本冊子の編集は、鳩山町教育委員会生涯学習課文化財保護・町史担当主任の永井智教が行い、文化財専門員川又隆一郎と文化財専門補佐員原口由美子、文化財調査補助員渡邊あずさがこれを補佐した。
4. 本冊子の執筆は永井・川又が行ったが、8頁のコラムについては文化財調査補助員の平山美由紀が担当した。
5. 本冊子を編集するにあたり、『鳩山窯跡群』I～IV、鳩山町史編さん調査報告書第10集『鳩山の遺跡・古代窯業』、『国分寺市史上巻』、『新編埼玉県史資料編3』を参考とした。

はじめに

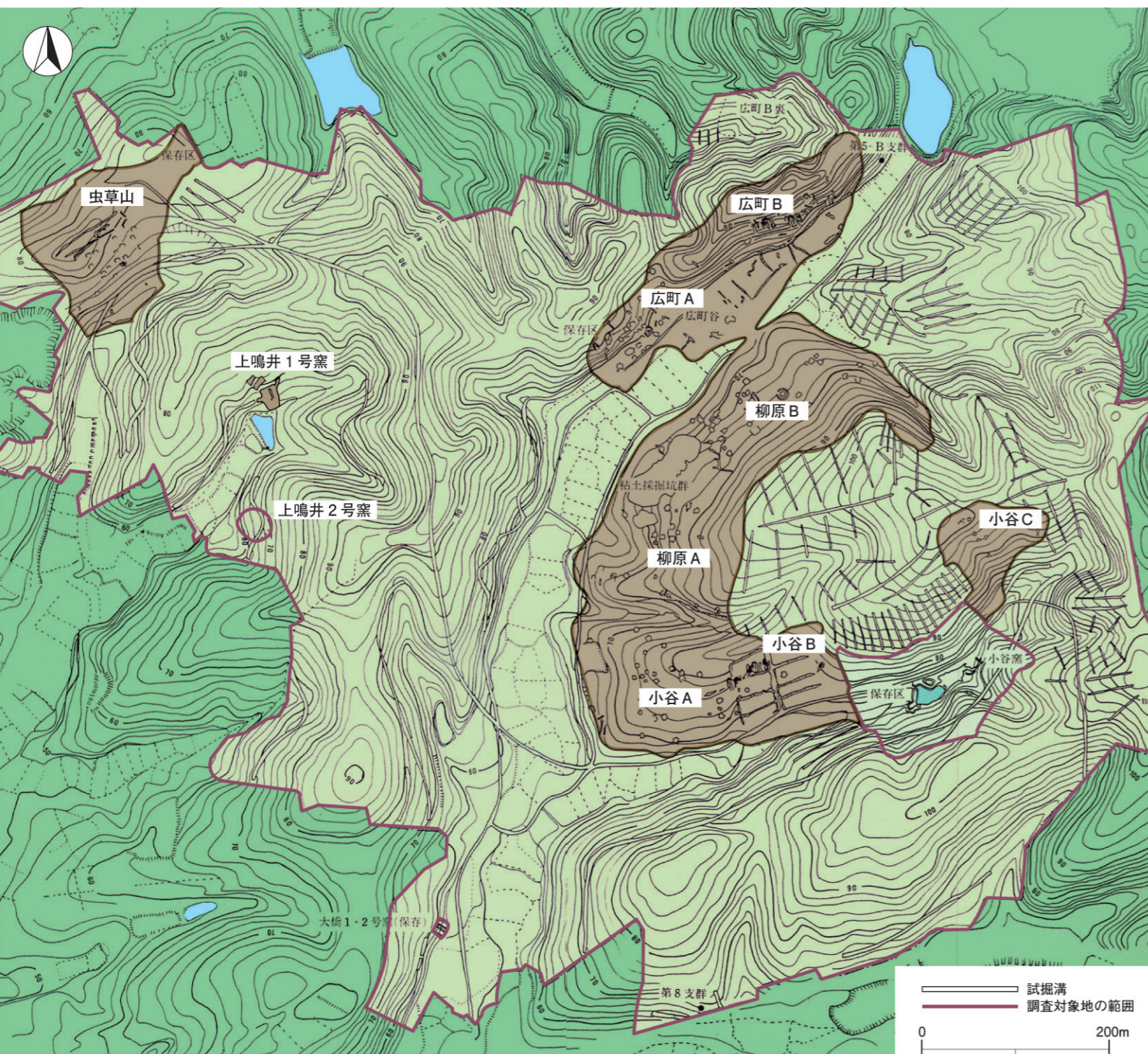
埼玉県のほぼ中央に位置する比企郡鳩山町周辺の丘陵地帯には、古墳時代～平安時代にわたる須恵器窯跡群として知られる「南比企窯跡群」が広がっています。この「南比企窯跡群」は、東松山市高坂地区の丘陵東裾で古墳時代後期初頭(5世紀末)に始まり、古墳時代末までは単発的かつ小規模生産で推移しますが、飛鳥・白鳳期に至って様相は一変、それまで丘陵裾に限定だった生産の場が丘陵内部に進出します。それは勝呂廃寺(坂戸市)の瓦生産を契機に丘陵内部へ入ると考えられており、以降、木の枝のように広がる谷筋に工房と窯場が多数設けられ、奈良・平安時代を通じて約200年間、古代のコンビナートさながらの世界が形成されます。これを「鳩山窯跡群」と呼びます。

ここに取り上げる「鳩山窯跡群」の発掘調査は、窯跡群全体の中では1割にも満たない面積ですが、ゴルフ場の造成という性格上、広大な範囲を対象としたものでした。専従する調査員5名、1日に動く作業員が最大200人以上という、今日では想像もつかない規模の大発掘の結果、窯跡だけでなく工房や粘土採掘坑がセットで確認されました。また、後の整理・報告によって示された成果は、特に須恵器の編年等、今日でも色あせることを知らないものです。今回は調査終了から25年を過ぎた節目に、その大発掘を振り返ってみたいと思います。



南比企丘陵 上空から見る秩父連山

鳩山窯跡群の全貌



調査直前の状況(正面に柳原、右は小谷左は広町)

■ 広町遺跡

- 所在地: 大字大橋字広町
 - 時期: 縄文時代(早期)、奈良・平安時代、近世～近代
 - 検出遺構: 奈良・平安時代(竪穴建物跡26軒、掘立柱建物3棟、土坑1基、水場4ヶ所、溝4条、須恵器窯跡18基、木炭窯跡1基、炭焼窯1基)
 - 出土遺物: 縄文時代(土器) 奈良・平安時代(土師器、須恵器、瓦、石製品、鉄製品)
- 丘陵緩斜面から裾部に広がる工人集落であるA地区と、急斜面下部に広がる窯跡のB地区からなる。中心となる8世紀中頃から後半には、国分寺瓦も生産している。また、木炭窯や鍛冶関連の遺構・遺物も注目される。



工房跡(A地区9号竪穴建物)



A地区全景



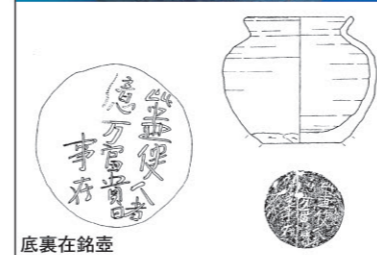
B地区全景



密集する窯跡(B地区12~14号窯)



B地区3号窯の出土遺物



底裏在銘壺



国分寺瓦

出土遺物



直立する煙道(B地区4号窯)

■ 柳原遺跡

- 所在地：大字大橋字柳原
- 時期：縄文時代(早期後葉～末葉、前期後葉他)、奈良・平安時代
- 検出遺構：縄文時代(土坑87基、礫群域1か所、炉穴2基、集石土坑2基)
奈良・平安時代(竪穴建物跡52軒、掘立柱建物9棟、土坑1基、瓦塔焼成土坑1基、溝13条、粘土採掘坑557基、須恵器窯跡3基、焼土址8基)
- 出土遺物：縄文時代(土器、石器) 奈良・平安時代(土師器、須恵器、瓦塔、石製品、鉄製品)
- 奈良時代の工人集落を主体とし、小支谷を挟んでA地区・B地区に分かれる。8世紀前半の成立期に竪穴建物跡(計16軒)が広範囲に展開し、工人集落の大本となる。集落中央の大規模な粘土採掘坑群は、鳩山窯跡群を象徴する遺構である。



粘土採掘坑と工人集落



群集する粘土採掘坑(B地区)



香炉形



短頸壺

粘土採掘坑出土遺物



B地区14号建物跡周辺
(掘立柱建物を伴う)



B地区15号建物跡周辺
(周囲に円形の排水溝を伴う)

工房跡様々



A地区9号建物跡



粘土を被覆する甕片

工房跡からの遺物出土状態

■ 小谷遺跡

- 所在地：大字大橋字小谷
- 時期：縄文時代(早期後葉～末葉)、奈良時代、中世、近世～近代
- 検出遺構：縄文時代(竪穴建物跡1軒、土坑10基、集石土坑3基、土坑址1基)
飛鳥末・奈良時代(竪穴建物跡44軒、竪穴状遺構4基、土坑15基、溝5条、焼土址14基、粘土採掘坑5基、須恵器窯跡15基、窯状遺構1基、木炭焼成遺構?4基)
- 出土遺物：縄文時代(土器、石器) 飛鳥末・奈良時代(土師器、須恵器、瓦、石製品、鉄製品)
- 工人集落を主体とするA地区とC地区、それに付属する須恵器窯跡のB地区からなる。奈良時代前半を中心とし、国分寺瓦も少ないが生産している。なお、C地区における8世紀初頭の竪穴建物跡や竪穴状遺構は、勝呂廃寺の創建瓦の搬出に関連した中継地と考えられている。



A地区工人集落全景



B地区窯跡全景



軸木を粘土で固定

ロクロピットのある工房
(A地区27号建物跡)



C地区全景



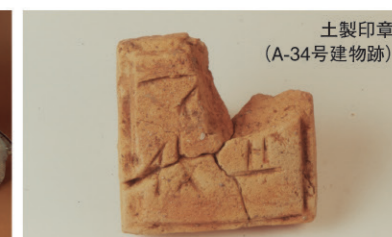
須恵器片使用のカマド(A地区12号建物跡)



壁溝と外延溝(A地区29号建物跡)



A-5号建物跡



土製印章
(A-34号建物跡)



B-8号窯跡



宝珠硯
(C-4号建物跡)

出土遺物

■ 虫草山遺跡

- 所在地：大字大橋字虫草山
- 時期：縄文時代(早期末葉、前期後葉～末葉)、古墳時代初頭、奈良・平安時代、江戸時代
- 検出遺構：縄文時代(竪穴住居跡(早期2軒、前期6軒))、土坑20基、集石1基、
奈良・平安時代(竪穴住居跡14軒、土坑10基、溝2条)
- 出土遺物：縄文時代(土器、石器、装身具) 古墳時代(土師器) 奈良・平安時代(土師器、須恵器、石製品、鉄製品)
江戸時代(土器、陶磁器、銭貨、銅製品)
- 丘陵頂上部緩斜面に広範囲に広がる遺跡。縄文時代が主体だが、奈良・平安時代の集落は須恵器生産に関与した8世紀後半から9世紀前半の工人集落である。この工人集落で作られた須恵器は、同じ谷の出口に築かれた虫草山窯跡と考えられている。



全景



縄文時代の住居跡



出土遺物

■ 上鳴井1・2号窯跡

- 所在地：大字大橋字上鳴井
- 時期：平安時代
- 検出遺構：平安時代(窯跡2基)
- 出土遺物：平安時代(須恵器、瓦塔、石製品)
- 9世紀後半の窯跡。2基の窯跡はいずれも南比企窯跡群における衰退期に属する。



1号窯遠景



1号窯



2号窯



遺物出土状況(1号窯)



コラム

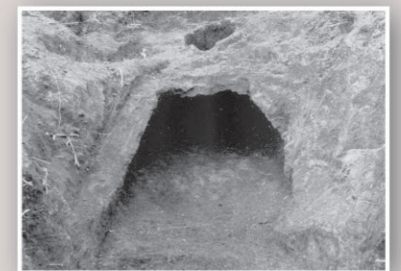
鳩山窯跡群における学史的発掘調査

鳩山周辺は古来より無数の瓦・須恵器片が散布し、「須江」などの地名も残る。さらに木材・粘土・水といった窯業に欠かせない素材が集約した環境でもあることから、江戸時代には古代武蔵国の主要な窯場として一部の研究者には知られていた。しかし今日のように注目されるようになったのは、昭和30年代の大学を中心とした発掘調査で窯跡群の実態が明らかとなり、古代窯業研究が進展したこと起因する。ここでは鳩山における窯跡の発掘調査の開始から、隆盛期の昭和30年代～40年代の調査までを振り返り、解明された窯跡群の実態と併せ、これら一連の発掘調査そのものの意義についてまとめておきたい。

鳩山で最初の発掘調査は、昭和6年の須江陶窯跡(須江字北ノ谷)である。地元では県指定史跡となつたと伝えるが、埼玉県庁の火災で当時の文書は失われ検証不可能である。現地には標柱があるが、その正確な位置も含め再調査の必要がある。昭和25年には今宿瓦窯跡(赤沼字水穴前)が、稲村坦元・斉藤忠を担当に調査された。赤沼国分寺瓦窯跡として埼玉県指定史跡となつたが、平成5年に国分寺瓦窯ではないことが明らかとなり、赤沼古代瓦窯跡と名称変更された。現地は土地所有者と地元有志が建設した覆屋によって保護され、鳩山の文化財保護の象徴として農村公園の一画で見学できる。



新沼窯跡(遺物出土状態)



虫草山窯跡



山田窯跡



瓦拓影図(ヘラ書人名瓦)金沢窯跡

本格的な調査は、昭和32年の立正大学考古学研究室による能瀬ヶ沢窯跡(熊井字能瀬ヶ沢)の発掘にはじまる。立正大学の久保常晴・坂詰秀一らによる南比企窯跡群の計画的な発掘調査の一環として実施されたもので、能瀬ヶ沢窯跡の直前には旧玉川村亀の原窯跡群を調査している。翌34年には、江戸時代から「亀井村泉井窯跡」として知られていた新沼窯跡(泉井字新沼)が、やはり立正大学によって調査された。ここでは大量の武蔵国分寺創建瓦が出土し、特に古代武蔵国の8割にも及ぶ郡名瓦も確認され、武蔵国分寺瓦生産窯として重要な生産拠点であったことが判明した。さらに立正大学による調査は翌35年の虫草山窯跡(大橋字虫草山)、36年の山田窯跡(赤沼字山田)・宮ノ前窯跡(奥田字宮ノ前)と続く。立正大学の他にも、昭和35年に早稲田大学(担当は滝口宏)、38年に大川清氏によって金沢窯跡(泉井字金沢)、39年には東京大学(藤本強ほか)によって小谷窯跡(大橋字小谷)の発掘調査が実施された。

これらの調査が実施された当時、学界の研究者たちの関心は専ら都城や古墳に向けられ、窯跡に限らず地方では発掘・研究もほとんど行なわれていなかった。しかし、この一連の調査やそれに基づく研究が相次いで発表されると、古代窯業研究のみならず、地域研究の必要性も叫ばれるようになった。南比企窯跡群の発掘は地方史研究の発展に貢献したという意味でも意義のある調査であった。

以上町内における学史上の窯跡調査を概観したが、最後にこれらの発掘以前から旧制小学校で訓導を勤める傍ら、独自に研究を行なった小鷹健吾氏に触れておきたい。「古いものは小鷹先生に聞きなさい」と地域の人から頼られる存在であった小鷹氏は、耕作中に遺物が出土するたびに呼ばれては直接現地に赴き説明をした。勤務先の小学校では低学年のクラスを受け持ち、唱歌の授業や天長節・紀元節などの行事の際には自らオルガンを弾きながら熱心に歌の意味を教え、拾った土器や瓦は学校で展示していたという(筆者の祖父母談)。そんな小鷹氏は鳩山が一大窯業遺跡として認知される以前から、旧亀井村周辺の窯跡の詳細な分布調査を行ない、その成果を「亀井村窯跡に就いて」としてまとめていたが、私家版であったため残念ながら学界に知られることはなかった。後に南比企窯跡群の発掘・研究に取り組んだ坂詰秀一氏は、小鷹氏を南比企窯跡群研究の先覚者とし、その功績を高く評価されている。(平山)

※写真は全て「新編埼玉県史料編3」からの転載である。

《須恵器と窯構造の変化》

鳩山窯跡群において生産された製品(須恵器・瓦)は、形態や出土状態の検討によりI~IX期の都合9段階での移り変わり(変遷)で理解されています。

これら段階には、国府や国分寺等で年代の明らかな資料との共伴例を根拠に年代が与えられており、時間の物差しとなるよう整理されています。

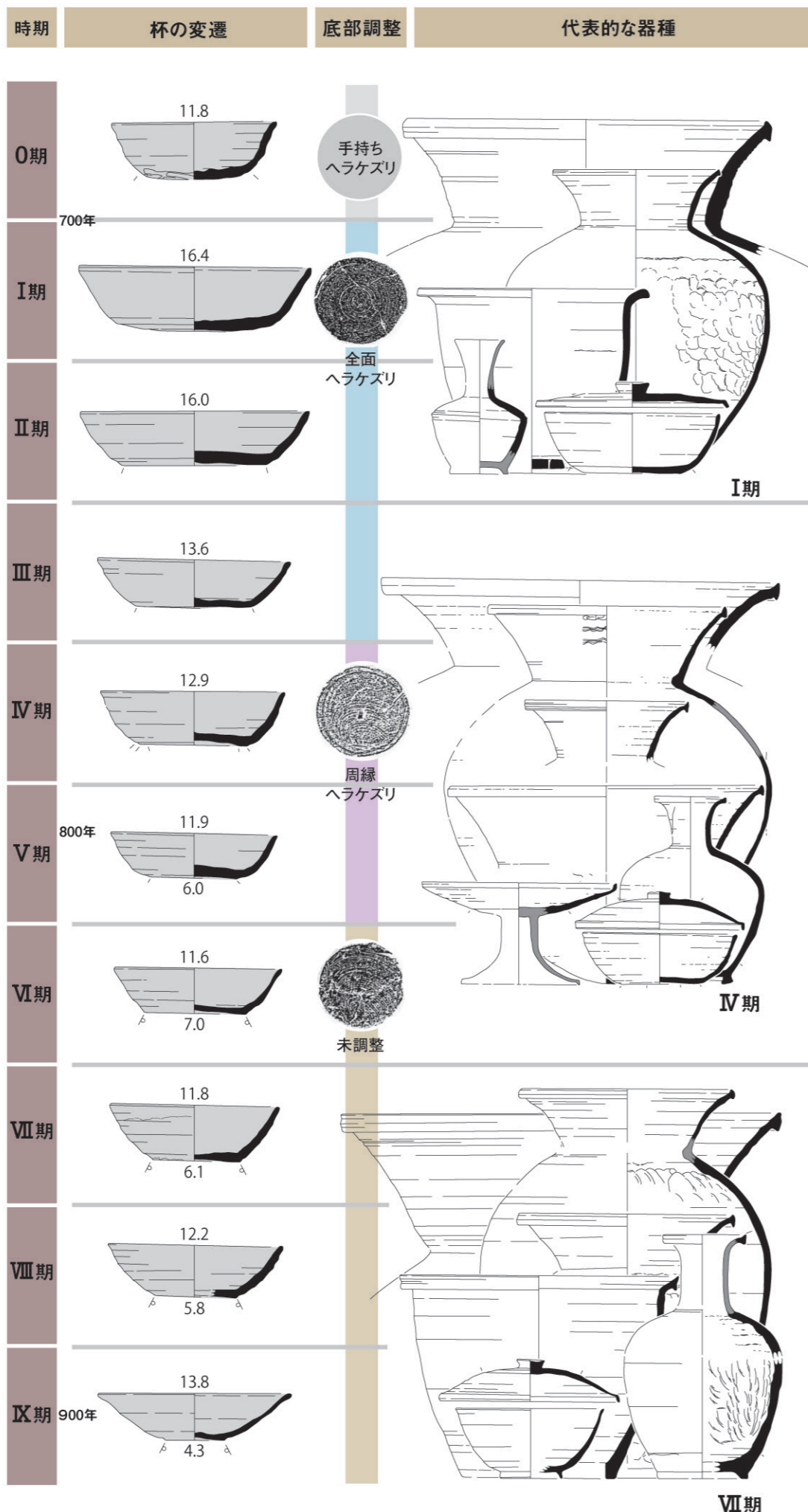
特につき坏(当時の茶碗)は、シンプルな形態で生産量・出土量も多く、口径や底部の調整方法を指標にその変化が捉え易く、各段階の設定も坏を基準としています。坏はV期を境に観察のポイントが変わります(0期は除く)。V期以前は口径の縮小化、V期以後IX期までは口径と底径の差によります。また、底部はI期以降最後まで糸切りですが、III期までは底部全面を回転ヘラケズリ、IV~V期は底部周縁を回転ヘラケズリ、VI期以降は未調整で糸切りのままとなっていくのです(右図参照)。

須恵器を焼く窯も、時期によりその形態は変化します。鳩山で最古と目される石田1号窯(7世紀後半・0期)は、地下式ですが煙道が水平気味に延び、その特徴的な構造から東海地方の工人の関与が想定されています。

8世紀前半~9世紀前半の最盛期は、7世紀と同じく地下式ですが煙道は直立するもので、規模も大形化します。

しかし衰退期である9世紀後半以降には半地下式となり、小形化していきます。

なお、2頁に示した窯跡群の展開模式図については、以上のような遺物や遺構の特徴を根拠としています。



時期を代表する遺物

0~II期



陶製仏殿(石田1号窯)



勝呂廃寺所用の瓦(赤沼古代瓦窯跡)

III期以降



武蔵国分寺に供給された瓦(新沼窯跡)



国分寺瓦に印刻された郡名(左:雷遺跡 右:新沼窯跡)

窯構造の変遷

石田1号窯(0期)



地下式

広町B11号窯(IV期)



地下式・直立煙道

境田1号窯(IX期)



半地下式